慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	閉じ込められた肖像画が生み出したもの : Oscar Wilde, "The picture of Dorian Gray" のGothic 的構造
Sub Title	What a locked-up portrait brought about : the Gothic structure of "The picture of Dorian Gray"
Author	坂本, 光(Sakamoto, Hikaru)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.37 (2001. 3) ,p.37- 51
JaLC DOI	
Abstract	The Picture of Dorian Gray is a story of the protagonist's secrets, and all the secrets come from, or are enabled by, the preternatural power of his portrait. It grows old and hideous, taking on Dorian's aging and his numerous misdeeds, and guaran-tees him an eternally youthful and innocent appearance. Thus the portrait objectifies Dorian's secrets in its image and wipes out their traces from his living self instead. Dorian then hides the portrait in an abandoned room. This structure gives the novel a paradoxically Gothic characteristic. It enables Dorian to physically lock up his secrets in the room, while the Gothic premise of the story is also hidden there. Consequently, the world outside the room accepts Dorian's preternatural youth and innocent looks without any suspi-cion, and such a world is that of the fairy tale in which wonders are received without any mistrust. In this fairy-tale-like world, Wilde repeats what he wrote in some of his fairy tales: thus it is a story of self-discovery and self-realisation. However, in The Picture of Dorian Gray, what works as the index for self-discovery is hidden from the world, and this allows the protagonist's self -realisation tobecome both uncontrollable and limitless. The long listgorgeous collection and his evil deeds hinted at throughout thestory are examples of this， reinforcing the Gothic characteristics ofthe story. The Picture of Dorian Gray is a Gothic novel thatrealises its`Gothicism' by hiding its premise.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20000930-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

閉じ込められた肖像画が生み出したもの

Oscar Wilde, *The Picture of Dorian Gray* の Gothic 的構造

坂　本　　光

The Picture of Dorian Gray は1890年に雑誌にて発表され，翌1891年には大きく改訂された上で，単行本として出版された。爾来，作者自身が受けてきた様々な評価を反映するように，読者のあいだに多様な解釈を生み出している。その一つが，この作品を Gothic 小説の一例として読む，というアプローチである。この作品が持つファウスト伝説的な設定，あるいは血筋，復讐といった，古典的 Gothic 小説に通じるモチーフに注目するなら，こうした読み方がなされるのも極めて自然なことだろう。またテーマや構成に注目するなら，この作品は同時期までに書かれた Wilde の fairy tale や短編小説に頻繁に見られるような，主人公の自己発見と自己実現の物語，秘密をめぐる物語などの延長上にあることがわかる。そして，こうした成り立ちを持つ *The Picture of Dorian Gray* の中心に置かれ，作品のタイトルとなり，また物語成立の要件ともなっているのが，主人公の代わりに年老いてゆくという超自然的な肖像画である。しかし作品の中心にあるはずの肖像画は，実際には物語の大部分で隠され，作品中の日常から隔離されてしまう。そしてこれが Gothic 小説としての *The Picture of Dorian Gray* に特異な姿を与え，またその特異さにこそ，この自己発見と自己実現の物語が Gothic 的特質を強く備えるに至った大きな要因が存在するのである。

作品冒頭で，主人公であるまだ成人前の青年 Dorian Gray は，その純真さと美貌に魅せられた画家 Basil Hallward のアトリエで肖像画のモデ

ルとなっている。そして，そこを訪れたBasilの友人Henry卿の言葉に刺激され，また完成した自分の肖像画を目にして，Dorianは自分の若さと美貌をはじめて自覚する。

> When he saw it he drew back, and his cheeks flushed for a moment with pleasure. A look of joy came into his eyes, as if he had recognized himself for the first time. He stood there motionless and in wonder, dimly conscious that Hallward was speaking to him, but not catching the meaning of his words. The sense of his own beauty came on him like a revelation. He had never felt it before.[1]

そしてDorianは自分の美貌が移ろいやすいものであることに動揺し，自分と肖像画とが入れ替わり，自分が永遠の若さを得て，代わりに絵の方が年老いてゆけばよいと願う。すると，その願いは何らかの不可思議な力によって実現し，これが小説全体の実質上の発端となる。

しかし，この作品がGothic的な様相を帯びてゆくプロセスを検討するには，肖像画がその超自然的な力を発揮する過程に，さらに注目することが必要である。Basilから自分の肖像画を譲り受けたDorianは，それをロンドンのtown houseの自室に飾り，裕福な有閑階級の青年ならではの，贅沢で気ままな生活をおくる。そして偶然入った場末の劇場で無名の女優Sibyl Vaneと恋に落ち，一時は結婚まで考えるようになる。しかし結局は彼女を捨て，それが原因でSibylはその直後に服毒自殺してしまう。Dorianが肖像画の変化に初めて気づくのは，こうしてSibylを捨て，一晩中街をさまよった後に，自室に帰った時のことである。

> In the dim arrested light that struggled through the cream-coloured silk blinds, the face appeared to him to be a little changed. The expression looked different. One would have said that there was a

touch of cruelty in the mouth. It was certainly strange.[2]

この時点では，Dorian はまだ Sibyl 自殺の一報を受け取っていない。しかし，自分の仕打ちに後ろめたいところのある Dorian は即座に肖像画の変化が意味するところに気づく。このように表現すると，肖像画はまさに Dorian の眼前にかかげられた良心の鏡として働いているように見えるが，この絵の機能はそのような単純なものではない。Dorian が見いだした変化は，良心の咎めゆえの錯覚ではないからだ。これは肖像画そのものに起こった物理的な変化なのである。これ以降，Dorian の老いと堕落は肖像画という物の一部として物質化され，Dorian とは別個の独立した存在として作品中に場所をしめることになる。したがって，この肖像画は良心の鏡として機能しているのではない。鏡のように前に立たなくとも，Dorian の老いと堕落は肖像画という物の中にそれ自体で存在するのである。だからこそ Dorian はそれを衝立の後ろへと隠し，さらには後日，ここ何年も締め切ったままだった school room へと運び込み，厳重に鍵を掛けてしまう。Dorian の老いと堕落は，このように独立したものとして物質化されたからこそ，秘密として隔離隠蔽することが出来るようになるのだ。

これ以降，Dorian は時折この部屋を訪れ，変貌してゆく肖像画の中に自分の犯した罪を読み取っては，倒錯的な喜びに浸る。このように，Dorian の肖像画がテクストとしての働きを持つことは明かである。そしてこの肖像画は，そのテクストとしての性質の中に Gothic 的な要素を強く備えている。物語を城，修道院，邸宅といった，日常世界から独立した小宇宙に設定するのは，古典的 Gothic 小説によく見られる手法である。そうした小宇宙は，しばしば何らかの疲弊を示し，またその疲弊によって日常世界からの，あるいは読者の住む世界からの逸脱や隔絶を示す。Poe の *The Fall of the House of Usher* (1839) は，その典型的な一例である。モデルの代わりに歳をとり，その堕落や退廃を記録してゆく肖像画は，

そうしたGothic的小宇宙の延長上にあり，またそのminimalな実現となっている。肖像画はまさに「魂の家」たる肉体が，その魂の老いと堕落を反映して姿を変え，醜く変貌してゆくさまを映し出していることになるのである。つまりこの肖像画自体が一つのGothic的テクストであり，*The Picture of Dorian Gray* はその肖像画の読者である主人公がテクストを読み解いた結果を実生活へと反映し，その実生活における経験が再びテクストへ投影されてゆく，という循環作用を記述していることになる。

このようにして物語は，変わらぬ若さとinnocentな容貌を保つ主人公が，罪を重ねながら快楽を求めて人生をおくる姿，そしてその罪が老いと共に肖像画へ反映されてゆくさまを描いて行く。主人公は我が身に引き受けた変わらぬ若さを絶対的な基準として，肖像画に反映された自己の本来の老いとinnocenceからの隔たりを読み取ってゆくわけである。つまり我々読者は，主人公が肖像画を頼りに，自己発見と更なる堕落という逆説的な自己教育を繰り返すさまを目にすることになる。この自己発見，あるいは自己像の設定とそれに基づく自己実現は，Wildeのfairy taleの中に幾度も見いだされるテーマに他ならない。1888年に出版された *The Happy Prince and Other Tales* では，その表題作 "The Happy Prince" がその典型である。また *The Picture of Dorian Gray* と同じく1891年に出版された *A House of Pomegranates* では，やはりその中の "The Young King" が典型的な一例となっている。[3]

前者の王子は *Sans-Souci* ("careless")，後者の若き王は *Joyeuse* ("joyful") という名前の，双方共にある意味で主人公のinnocenceを象徴するような宮殿に住んでいたと設定されている。しかしこの二人の主人公達は，ある契機によって社会的な自意識に目覚め，自らが設定した自己像の実現をはかり，その過程で困難を経験することになる。なかでも "The Young King" の設定は *The Picture of Dorian Gray* に酷似したものである。主人公は，前の王の一人娘が身分違いの男との秘密結婚でもうけた一人息子で，王の不興を買って牧童の子として育てられたものの，自らの余命を

知った王によって呼び戻され，その跡を継ぐこととなる。物語はその戴冠式までの様子を描いたものである。宮殿に住むこととなった主人公は，その中に飾られたものの美しさに惑溺し，行儀見習いの最中に失踪しては，宝石で飾られたアドニスの像に見ほれている様を発見されたりするようになる。こうした設定は，まさに1891年版における Dorian の出生をめぐる事情，母と祖父の遺産を継いだ後の Dorian の美の遍歴と相通じている。そして "The Young King" において主人公が明確な自己像を持つに至る契機となるのは，自らの姿を映した鏡であり，これもまた Dorian の内面をあらわにしてみせる肖像画と同様の機能を持つ。しかし *The Picture of Dorian Gray* において鏡の役割を果たす肖像画には，極めて特殊な点が存在する。一貫して主人公以外の登場人物から隠され，また作品の大部分では読者の目に触れることさえ無いのである。この肖像画は school room へ隠され厳重に鍵をかけられてしまうと，その後は小説の結末まで，主人公以外の誰の目にも触れない秘密となる。秘密を打ち明けられた直後に殺される画家 Basil が，唯一の例外である。そして肖像画は，絶対的な秘密として物語の中に中心的な位置を占めることになるのである。

Judith Halberstan はその著書の中で，この作品の性的側面に注目した上で Dorian の怪物性を説明し，怪物性が性的な秘密を体現しているわけではなく，逆に秘密の存在が性的倒錯の前提となっているのだ，としている。[4] 作品の性的側面に主たる注意を向けるか否かに関わらず，この指摘は作品の構成を端的に指し示しているといえるだろう。なぜなら，肖像画がモデル本人の代わりに歳をとり堕落と退廃の痕跡をその上に刻み込んでゆく，というだけではこの物語は成立しないからだ。主人公 Dorian という人間が，その表層のみを表す肉体と，内面的な深みのみを表す肖像画の二つに分離されても，それだけでは十分とは言えない。内面を示す肖像画が隠され，作品中の日常世界から厳重に隔離されてこそ，初めて変わらぬ若さを保つ主人公の肉体がその特異な効果を発揮することになるのである。

そして肖像画が秘密として隠されたからこそ，主人公 Dorian はこの物

語の大きな部分をしめる，豪奢で放縦な生活へと乗り出してゆくことになる。そうしたDorianの遍歴を示すものとして長々と記述されるのが，第11章にあるよく知られた様々な美のコレクション，それによって示される宝石，楽器，織物などへの惑溺である。しかし快楽主義者Dorianの遍歴は，このいささか退屈なリストに列挙されたものに留まるわけではない。Dorianの遍歴には，具体的には書かれていないものの，しかしその存在が明確に言及されている領域，つまり男女を問わずDorianと特に親密になった人々が身を持ち崩し，社会から脱落してゆくに至るような，罪の領域が存在する。物語中の記述を見るなら，服装や様々なコレクションに見られるダンディズムがDorianに関する社会的イメージとして定着する一方，彼の不品行にまつわる悪い噂も，また同様に拡がっていることがわかる。したがってDorianの遍歴を考える上で，唯美主義的側面は，重要ではあってもその一部に過ぎないことを忘れるべきではない。

そしてその遍歴の契機となったのが，肖像画を閉じ込め隠すことによって成立した秘密である。Wildeは“The Sphinx without a Secret”(1887)で，何の必要もないのにわざわざ秘密を作り，その言わば虚構の秘密をさらに想像力で埋めることに刺激を受ける女性を描いている。Dorianの抱える秘密は，肖像画に象徴されるような自己像に関する秘密である。そして超自然的な力に支えられ，この秘密の絶対的な有効性は，肖像画が人目に触れない限りは揺らぐことがない。このメカニズムに支えられ，Dorianの様々な経験，遍歴を通しての自己発見，自己実現は，何の社会的抑制も受けず，際限なく肥大化してゆくことができるのである。その一端がコレクションのリストであり，悪い噂のもととなった様々な悪事であることは，言うまでもない。したがってこの物語が本格的に展開を始めるのは，肖像画が超自然的な作用を始めた時というよりも，それが隠され秘密となった時点からである，と見なすことができる。つまり超自然的な作用は，単にDorianに永遠の若さをもたらしているだけでなく，物語の展開の中心となる秘密を成立させる前提条件として機能しているということ

になる。

こうして主人公は肖像画を隠し，それによって自分の内面を物語中の日常から消し去ってしまう。そしてこれは同時に，すでに指摘した意味でのGothic 的テクストとしての肖像画，つまりこの作品における Gothic 的要素の泉源となっているものを部屋に隠し，隔離してしまうということでもある。作品冒頭で，主人公 Dorian Gray はまだ成人前の，誰もが一目でその若さと innocence に魅入られるような美青年として描かれている。そしてその後，結末までの18年間，主人公は超自然的な力によって，その若々しく innocent な美貌を維持し，同時に数々の悪行を重ねてゆくのである。こうした設定において問題となるのは，この不思議な美貌を作品中の日常世界，つまり主人公を取り巻く人間たちがどのように受け取るか，という点だろう。歳を経ても変わらぬ美貌も，度を超せば異形と見なされる。多くの吸血鬼小説で歳をとらぬ吸血鬼達が隠棲し，あるいは放浪を続けるのは，これが理由である。それを Wilde は以下のように説明する。

> Even those who had heard the most evil things against him—and from time to time strange rumours about his mode of life crept through London and became the chatter of the clubs—could not believe anything to his dishonour when they saw him. He had always the look of one who had kept himself unspotted from the world... They wondered how one so charming and graceful as he was could have escaped the stain of an age that was at once sordid and sensual.[5]

この記述からまず分かるのは，作品中の人々はみな19世紀的な physiognomy の信奉者であるということ，人の見かけに最大限の信頼を置いて，人格はその人の容姿に反映されると信じている，ということである。そのもっとも明確な例は肖像画の作者である Basil Hallward で，彼の言葉の

端々にこのことが窺える。Basil はかつて法外な報酬を約束された肖像画の依頼を断ったが，その理由を "There was something in the shape of his fingers that I hated. I know now that I was quite right in what I fancied about him. His life is dreadful."[6] と説明し，一方で "But you, Dorian, with your pure, bright, innocent face, and your marvellous untroubled youth—I can't believe anything against you." と断言する。作中の日常世界では，Dorian の変わらぬ innocent な若さこそが唯一の現実であり，それを支えている Gothic 的な作用は，ただ単に存在しないのである。

Henry 卿が Dorian を自らの影響力のもとに形づくられた作品であると見なし，またその肖像画は Basil による作品であることを考えるなら，これを1891年版序文の有名な一節，"All art is at once surface and symbol./Those who go beneath the surface do so at their peril./Those who read the symbol do so at their peril."[7] に結びつけて考えることも出来るだろう。Dorian Gray という主人公の名前は，Wilde の若い友人 John Gray に由来すると考えられている。そして David Sweet によるなら，この John Gray は1890年に Paris を訪れ，かの地の先端的な芸術運動に触れて，帰国後 Wilde に大きな刺激を与えている。そして Wilde 自身，翌年早々には自ら Paris へと渡り，そこで Mallarmé や Fénéon の影響のもと，この序文を書いたのである。[8]

一方，physiognomy の背後にある，罪や悪はその印を肉体に残すのだ，と言う考え方自体に注目するなら，Mighall の言うように，Wilde は Dorian の堕落を示すのに犯罪学や病理学の枠組みを活用しておきながら，同時に肖像画という超自然的な事象を導入し，物語が典型的な法医学的ディスクールとなることを妨害している，ということになる。そしてさらに Mighall は，当時，自慰行為の弊害を喧伝するために書かれた一群の文章を引き合いに出し，こうした構造は，悪弊とその結果のつながりを暗示するにとどめ，それによって真実性や説得力を損なうこと無しに弊害を

誇張するためのレトリックだ，と指摘する。[9]

しかし，主人公と肖像画の関係を前提に物語の構造を検討するのなら，この二つの間に起きた超自然的な事象そのものにこそ注目すべきだろう。この不思議な出来事が物語のレベルで如何に消化されているかという点に，その働きを端的に見て取ることが出来るはずだからである。すでに引用したように，Dorian の18年間変わらぬ若さの異様さや，彼をめぐる酷い噂とその innocent な容貌との矛盾は，超自然的な力に守られた Dorian を目の前にすれば，何の疑問も無くいとも簡単に解消されることになっている。これは Gothic 小説よりも fairy tale にこそふさわしい記述である。なぜなら Gothic 小説，あるいはさらに一般的に何らかの怪異や恐怖を描く作品の前提となるのは，日常性を基準とした上での異常さ，日常からの逸脱の感覚であるからだ。読者の日常からは異常と見える事柄であっても，それが作品中の日常にその一部として組み入れられてしまえば，もはや怪異を描いているとは言えない。それは wonder tale，つまり不思議や驚異をあつかう物語としてのお伽話の範疇に属するものとなってしまうのである。

主人公の肖像画こそがこの小説の Gothic 的構造を生み出す要因である，ということに間違いはないだろう。しかし主人公はそれを town house の school room へと閉じこめてしまう。そうすることによって，その部屋の外にある作品中の日常世界から，そしてその日常世界の中で暮らす自己の超自然的な若さから，Gothic 的な怪異，異常さを拭い去ることに成功するのである。またこのような形で，school room の外に Gothic 的なものから距離を置いた視点を確立した上で，主人公は自分そのものでもある Gothic 的肖像画を外在するテクストとして認識し，読み，相互作用を繰り返すことになる。school room に秘密として隠されるのは主人公の罪や堕落だけではない。この作品の Gothic 小説的な成り立ちも，その部屋に閉じ込められ，隠されてしまっているのである。

しかし同時に，肖像画を閉じ込めるという行為は，大都市 London とい

う開かれた空間に秘密という形でGothic的な異界を潜ませる，という効果も生みだしている。古典的Gothic小説においては，Gothic的異界と日常世界との隔たりは，多くの場合辺境に置かれた自律的な小世界——たとえば僻地にある城や邸宅——などや，厳しい戒律と高い壁で世間から隔離された修道院のように，地理的，空間的に表現される。これと同様によく見られるのが，明かすことのできない秘密を抱え込み，それによって情報共有のレベルで日常からの隔たりを確立する，という手法である。*Caleb Williams* (1794) では，主人公が雇い主の秘密を察知し，その結果自らが秘密そのものとなってイングランドを転々と移動する。また *Frankenstein* (1818) では，物語はヨーロッパから極地まで舞台を移してゆく。そしてこれらの作品は，いずれの場合も秘密によってそれぞれのGothic的状況を維持しているのである。またStokerが後に書く *Dracula* (1897) は，TransylvaniaのDracula城という地理的異境に始まるが，舞台がLondonへと移った後は，一部の人間だけに共有された秘密という形で日常からの隔たりを維持し，怪異が大都市へと拡散することを阻止している。*The Picture of Dorian Gray* において秘密が持つ機能も，これらと同様なものである。つまり肖像画は，空間的に隔離されることによって物語中の日常からGothic的要素を拭い去り，同時に秘密となることによって，Gothic的異界をfairy tale的な作中の日常世界へと密かに潜り込ませる，という二重の機能を負っていることになる。

The Picture of Dorian Gray の持つこのような構造は，最初に発表された1890年版において，すでに見てとることができる。そしてそれは1891年版が受けた改訂によって，さらに複雑さを増すことになった。この作品は1891年に単行本として出版される際，大規模な改変と加筆を受けている。よく知られているように，改変の多くは1890年版に顕著であった同性愛を暗示する表現を和らげる，という効果を上げた。またWildeは新たに6つの章を書き足し，最後の章を2分割するという大がかりな加筆によって，血筋と復讐という古典Gothic小説に典型的なモチーフを導入し，それに

よってこの作品のGothic的側面を強化している。

すでに述べたように，主人公が肖像画を隠すきっかけとなったのは，彼が捨てた女優Sibyl Vaneの自殺によって肖像画に表れた最初の変化であった。その後，肖像画は隔離され，作中の日常世界から完全に遮断されてしまう。そしてこのGothic的肖像画を再びschool roomの外にある日常世界へと結びつけるのが，加筆によって導入されたSibyl Vaneの弟James Vaneである。追加挿入された第5章で，Jamesは姉思いの青年として，初めて読者に向かって紹介される。その後，Jamesはいったん物語から姿を消すが，同じく追加された第16章にて再び読者の前に登場する。これは姉Sibylの自殺から18年後のことである。このエピソードで，主人公Dorianは馴染みにしている場末の阿片窟を訪れ，長い間彼を姉の仇として探し求めてきたJames Vaneに偶然遭遇することになる。JamesはDorianに拳銃を向けるが，Dorianは自らのinnocentで若々しい美貌を楯にしらを切り通し，人違いだと主張して，いったんは危機を逃れることに成功する。しかし，これも追加された第17章で，Dorianは再びJamesに遭遇することになるのである。最初の遭遇から一週間後，Dorianはロンドンを離れ，自らのcountry houseで客をもてなしているが，そこでガラスに顔を押しつけ中をうかがうJames Vaneを目撃し，恐怖のあまり失神してしまう。Dorianはそもそも自分が見たものが本当にJamesなのか，それとも恐怖ゆえの幻なのかも判然とせず，恐慌をきたすのである。Jamesはまさに，主人公がschool roomに閉じ込め，若さを保つ自分の身体から拭い去った過去からの使者であり，同時にschool roomからfairy tale的な世界へと浸み出してきたGothic的なるものの一部として機能しているのである。

しかし同様に追加された第18章で，Jamesはハンターに誤って射殺されてしまう。こうして実際には何も起こらないまま，過去からの脅威は去り，Dorianはこれを知って安堵することとなる。しかしJames Vaneという登場人物と，彼が導入した復讐のsubplotは，決してその場だけの一

エピソードとして機能しているわけではない。そのことは，これに続く第19章（1890年版の最後の章をほぼそのまま二分割した最初のもの）に目を向ければおのずと明かである。そこでは主人公 Dorian が田園の村を訪ね，Sibyl Vane によく似た少女に出会う，というエピソードが語られている。二人は恋に落ち，Dorian はその村をしばしば訪れるようになるが，彼女を無垢なままに守ろうと自分から身を引いた，というものである。Dorian はこれを自分の善き行いとして Henry 卿に話すが，Henry 卿はこの行為に偽善を指摘し，更にはその捨てられた少女は自殺しているかもしれない，と口にする。これを聞いた Dorian は動揺し，それを引きずったままで作品全体の締めくくりとなる第20章をむかえ，そこで肖像画と対峙することになる。そして自らの過去に封印するため，数々の罪を記録してきた肖像画を切り裂こうと試み，逆に自らの命を落とすのである。

つまり，Sibyl の自殺によって始まった主人公と肖像画の乖離は，物語の中によく似た少女が登場し，主人公が最初の過ちをなぞるように振る舞うことによって――より正確には Dorian 自身がそう考えることによって――その環を閉じるのである。この対になった発端と結末，肖像画の超自然的な作用の始まりと終わりは，1890年版でも既に目にすることが出来る。そして1891年版における James Vane の導入は，こうした結末に至るまでのプロセスをさらに明確なものとしていることになる。Wilde は改訂によって同性愛的な要素を抑圧したが，一方では，主人公の秘密が閉じ込められた場所から漏出してゆくありさまを強調しているのだ。

このように *The Picture of Dorian Gray* とは秘密をめぐる物語であり，そしてその秘密を支えているのが肖像画の持つ超自然的な働き，またそれによって実現した秘密の物質化とその持ち主からの分離である。物となった秘密は school room という限定された空間に隔離隠蔽され，その結果，school room の外にある広大な空間で日常生活を送る Dorian Gray からは，過去という深みが欠落することになる。そうして成立するのが作中における fairy tale 的な日常世界であることはすでに述べた。そしてその中

に，Wilde は自らが fairy tale で取り上げてきた自己発見と自己実現の物語を繰り返しているのである。したがって Dorian に与えられた永遠の若さ，変わらぬ innocent な容貌とは，表層しか持たぬがゆえのいびつさを示すものであり，また Dorian がたどる自己発見と自己実現のプロセスには，その主体が深さを持たぬ人間であるが故に，歯止めとなるものが無い。つまり *The Picture of Dorian Gray* は，不思議な肖像画という Gothic 的設定をもって初めて成立した fairy tale であり，また同時に，その Gothic 的なものが隔離隠蔽されることによって主人公の遍歴がおのずと肥大化し，作品全体が Gothic 的性質を強く帯びるに至る，という構造を持つ物語なのである。

［この論文は日本英文学会第72回全国大会（2000年5月20-21日）における口頭発表をもとに，一部加筆したものである.］

注

1 Oscar Wilde, *The Picture of Dorian Gray,* ed. Donald L. Lawler (New York: Norton, 1988) 25.

2 *The Picture of Dorian Gray* 72.

3 "Oscar Wilde's Fairy Tales: The Mirror and Self-Recognition"（『日吉紀要英語英米文学』31号117-149）を参照.

4 Judith Halberstam, *Skin Shows: Gothic Horror and the Technology of Monsters* (Durham: Duke UP, 1995) 71.

5 *The Picture of Dorian Gray* 99.

6 *The Picture of Dorian Gray* 117.

7 *The Picture of Dorian Gray* 3.

8 David Sweetman, *Explosive Acts: Toulouse-Lautrec, Oscar Wilde, Félix Fénéon, and the Art and Anarchy of the Fin de Siècle* (New York: Simon & Schuster, 1999) 239-40.

9 Robert Mighall, *A Geography of Victorian Gothic Fiction: Mapping History's Nightmares* (Oxford: Oxford UP, 1999) 196-8.

Synopsis

What a Locked-up Portrait Brought about: The Gothic Structure of *The Picture of Dorian Gray*

Hikaru Sakamoto

The Picture of Dorian Gray is a story of the protagonist's secrets, and all the secrets come from, or are enabled by, the preternatural power of his portrait. It grows old and hideous, taking on Dorian's aging and his numerous misdeeds, and guarantees him an eternally youthful and innocent appearance. Thus the portrait objectifies Dorian's secrets in its image and wipes out their traces from his living self instead. Dorian then hides the portrait in an abandoned room. This structure gives the novel a paradoxically Gothic characteristic. It enables Dorian to physically lock up his secrets in the room, while the Gothic premise of the story is also hidden there. Consequently, the world outside the room accepts Dorian's preternatural youth and innocent looks without any suspicion, and such a world is that of the fairy tale in which wonders are received without any mistrust. In this fairy-tale-like world, Wilde repeats what he wrote in some of his fairy tales: thus it is a story of self-discovery and self-realisation. However, in *The Picture of Dorian Gray,* what works as the index for self-discovery is hidden from the world, and this allows the protagonist's self-realisation to

become both uncontrollable and limitless. The long list of his gorgeous collection and his evil deeds hinted at throughout the story are examples of this, reinforcing the Gothic characteristics of the story. *The Picture of Dorian Gray* is a Gothic novel that realises its 'Gothicism' by hiding its premise.